南詩稾八十二　秋雨詩に、屋穿況値雨騎月、自注に、俗謂二十四五雨爲騎月雨、主霖霪不止、また毎年三月十五日、江戸は雨ふる事おほし、俗人梅若の涙雨とよぶ、唐土にては大風ふくといへり、明の鄭仲夔が耳新に、毎年三月十五六、俗相戒爲馬和尚渡江日、必有大風敗舟、中山傳信錄風暴日期に、三月十五日眞人颶などあり、又雷鳴あれば梅雨はるゝといふ、歳時廣記に、瑣碎錄云、芒種後遇壬入梅、遇雷電謂之斷梅葛原詩話に、放翁が詩の自注を引たり、とあり、

〔梅園日記五〕甲子雨　天文九年の守武千句に、など大黑をかたらはざらん、甲子にふりつることよ雨のくれ、といへるは、今もいふ甲子の雨にて付たる句なり、また多聞院日記に、天正三年三月廿五日、天氣快然、春ノ甲子ニ雨下レバ大炎ト百姓申、先以雨不下珍重候とあり、按ずるに、朝野僉載に、諺云、春雨甲子、赤地千里、全唐詩徐寅詩に、豐年甲子春無雨、夏雨甲子、乘船入市、孔氏談苑に、乘船入市者雨多也、陳師道が后山集和黃預久雨詩に、甲子猶逢夏、朝雨脚垂、秋雨甲子、禾頭生耳、杜詩千家註補遺に、此八字齊民要術にありといへり、黎文集五百家注に、朝野僉載を引て木頭垂耳に作れり、冬雨甲子、鵲巢下地、其年大水また觀象玩占に、春雨甲子□日旱、夏雨甲子四十日旱、秋雨甲子四十日涝、冬雨甲子二十七日寒雪、とあり、かの百姓の申しは、これによれるなるべし、さて今は四時ともに甲子の雨は、長雨のゑるしなりとするは、田家五行に、春雨甲子、乘船入市、言平地可通舟楫也、夏雨甲子、赤地千里、一云赤尺古字通用、言爲水阻、跬步若千里之艱也、秋雨甲子、禾頭生耳、冬雨甲子、飛雪千里、牛羊凍死、また雨航雜錄に、徐光訓曰、子爲水位、雨於甲則水徵など見えたる說によれるなるべし、されども赤地を尺地とするは非なり、○下略

〔和漢三才圖會三天象〕以風方角知雨晴　五雜組云、詩曰、習習谷風以陰以雨、谷風東風也、東風主發生、故陰陽和而雨澤降、大抵東風必雨、然關西西風則雨、東風則晴、　按、本邦亦每雖東風生雨、如梅雨及土用中以東風晴、秋雖北風生雨、秋夜則以北風晴、○中略　凡春東風、夏南、秋西、冬北、是時旺分爲常、從時氣所生方風必生雨、如春木南火秋金北水、是也、從風方生時氣者必晴、東木夏火西金冬水是也、蓋五月西者非正西、謂坤乾之土氣也、夏火戊未土以可知、古人未言之、以理自然、戲愚案而已、